

大学経営政策研究

第3号 (2013年3月発行) : 37-52

# 中国における貸与奨学金の効果

— 高校生の進学選択に着目して —

王 帥



# 中国における貸与奨学金の効果

—高校生が進学選択に着目して—

王 帥\*

## The Effect of Student Loans in China: Focusing on College Choice of High School Students

Shuai WANG

### Abstract

How to reduce the financial barriers of poor high school students and how to secure their opportunities for higher education have been critical problems in China. Student loans have become an essential component of financial aid, but the effect of student loans is not as good as expected. The purpose of this study is to analyze the effect of student loans focusing on college choice of high school students.

The results show that student loans influence students in choosing different types of colleges and some students decide not to apply to university to avoid a debt burden. This implies that the student loans scheme should be improved to increase the effectiveness of its impact on access equality.

### 1 問題意識と課題

中国における高等教育の拡大はより多くの学生に教育機会を提供しているが、他方で私的負担額の高騰によって進学を断念する経済困難学生が増加している。このような背景の中、さまざまな経済支援政策、特に大学進学前に利用できる貸与奨学金が、家計困難な学生の教育機会を保障し、また教育機会の平等を促進することが期待される。中国では、一般銀行助学贷款のほか、1999年からの国家助学贷款の実施、さらに2007年に始まった生源地助学贷款など、貸与奨学金が徐々に充実してきている。しかし、高校生が進学選択を行う際に、貸与奨学金が十分に知られているのか、どのような学生が貸与奨学金を利用しようとしているのか、特に経済発展が遅れている地方出身の学生にとって貸与奨学金がどのような役割を果たしているのか、という点について課題が存在する。しかもこれらの課題に対する答えは未だ明らかになっていない。

以上の問題関心から、本研究は実証調査を通して、高校生が進学選択に着目し、貸与奨学金の効果を探りたい。

---

\*東京大学大学院教育学研究科 博士課程

## 2 先行研究

### (1) 進学選択における貸与奨学金の効果

Zidermanら(1995)とJohnstoneら(1998)は、学生やその親によって高等教育コストを負担することが、発展途上国における高等教育機関の拡大からもたらされる財政難の問題を解決する方法であると指摘している。Johnstone(2005)は、貸与奨学金の実施が、高等教育機関への資金提供やコスト分担だけでなく、大学進学機会の拡大、学生の進学選択の多様化、及び大学生生活の改善などにも役立つと指摘している。貸与奨学金は、特に家計困難な学生に進学のコツを与え、教育機会均等と社会公正を促進すると示している(Johnstone 2005)。

日本の貸与奨学金効果に関する実証研究が少ない(小林 2007)中、藤村(2009)は、貸与奨学金が進学意志を持つ中低所得層の大学進学を底上げする誘因になっていないものの、中低所得層が貸与奨学金の潜在的な需要層であると指摘されている。また、日本と同じく、中国の経済支援効果に関する実証研究も少ない。そのうち、钟(1999)らは学生の進学選択に、経済支援政策の利用と家計状況が影響すると示し、Long(2003)は奨学金が経済的なギャップを埋める役割が大きく、学生の進学選択にも影響が大きいと示している。丁(2000)は高所得層学生では仕送りの割合が高く、低所得層学生では貸与奨学金の割合が高いという結果から、貸与奨学金が低所得層学生の教育機会を保障する重要な手段であると論じている。

ところが、貸与奨学金が低所得層学生の進学機会の保障や、高等教育の財政困難の緩和に役立つ一方、貸与奨学金は万能薬ではない(Woodhall 1983)。Johnstone(1999)は学生が、敢えてコストの低い高等教育機関や教育プログラムを選ぶ理由は、高等教育に進学する際に貸与奨学金を借りなくて済むからであると説明している。一方、Johnstone(2010)は発展途上国において、貸与奨学金の利用が拡大されず、供給より需要が大きく、貸与奨学金の支給が制限されているとも指摘している。

### (2) 情報ギャップ

情報ギャップとは、「大学進学に関する情報(とりわけ経済的要因に関わる情報)が、家計の所得水準や人種等によって偏在しているために、学生支援制度が有効に機能していない」ということである(濱中 2009)。アメリカでは多数の実証分析が蓄積されているが、その中での一つの結論は、家計収入が少ない学生は、手に入れる情報が少なく、情報の正確性に欠けるだけでなく、情報の収集能力も弱いため、大学を選択する際に不利な立場であるということである(Horn 2003; Long 2008; Olson 1984)。大学進学する際に低所得層学生は経済支援への重視度が弱い(Long 2008)。Johnstone(1999)は、家計困難な学生は経済支援で進学できることを知らないため、中等教育段階から大学進学への抱負がなくなり、高等教育への進学を断念しやすいと指摘した。このような状況に対して、Johnstone(2002)は、政府と大学が経済支援政策に関する宣伝を強化し、中等教育段階で貸与奨学金と貸与奨学金の役割や意義を学生に紹介し、困難な家計の代わりに経済支援で進学できることを伝えなければならないと提言している。

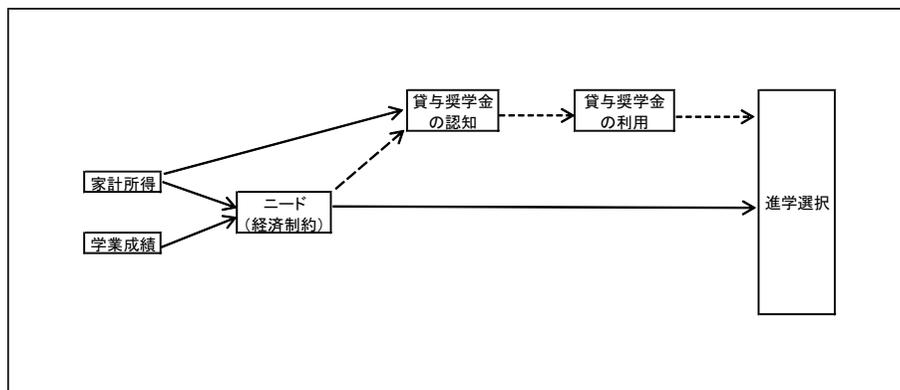
日本では、情報ギャップに関する研究があまり注目されず、ローンに関する知識についての教育

もほとんど行われていない（濱中 2009）。中国は日本と同じく、情報ギャップ問題に対する関心が薄く、先行研究の蓄積が少ない。その中、Shi（2007）らは中国では経済支援の情報を進学先決定前に入手できる学生と、後になって入手する学生で、ギャップが大きいと指摘されている。羅ら（2011）の研究でも、家計状況の悪い学生は大学教育コストに関する情報量が少なく、不利な立場に立っていると指摘している。逆にLoyalka（2011）らは、経済支援の情報が低所得層学生の進路選択に及ぼす影響は少ないと示している。ただし、いずれの先行研究においても、高校生の進路選択において貸与奨学金がどのような役割を果たしているのか、という課題について明らかにしていない。

### 3 分析枠組と用いるデータ

#### (1) 分析枠組と課題の設定

図 3-1-1 分析枠組み



授業料の徴収によって、大学に進学する際に学力だけでなく、家計の経済力も問われている。家計困難な学生にとっては、経済的支援が進学選択する際の経済的制約を緩和する役割を果たすことが期待される。これにより、学生の教育機会が保障され、より平等な進学選択ができることになる。ただし、経済支援制度があることは、学生の進学選択に効果を及ぼすことをそのまま意味するわけではない。なぜなら、経済支援が効果を果たすまでに、少なくとも三つ大きな課題がある。第一に、経済支援が必要となる学生層を確実に把握すること。第二に、経済支援に関する情報の提供と需要が一致すること。第三に、学生が着実に経済支援を利用して進学すること。

具体的に言うと、まず、第一の課題については、経済支援が必要とする学生がどれぐらい潜在しているのか、どのような特性を持っているのかを明確にする必要がある。これは、経済支援の対象や目標の設定、及び支援資金の増減と深く関係する課題である。経済支援によって、より多くの学生をより効果的に支援するために、学生の需要を把握しなければならない。次に、第二の課題については、貸与奨学金制度を利用する際に、学生の申請が必要となっている。そうすると、貸与奨学金制度に関する情報が入手されないと、申請の行動が起こらないということになる。この意味で、

情報の収集は経済支援の利用にとって第一歩である。高校生は経済支援制度を知っているかどうか、特に経済支援が必要と見られる学生において、貸与奨学金制度自体の認知度がどれぐらいなのか等の課題を明確にする必要がある。また、第三の課題についてであるが、貸与奨学金を知っていても、最終的に申請するか、否かの選択肢がある。貸与奨学金は返済義務があるため、家計困難な学生にとって大きな負担となることは間違いない。大学教育を受けるチャンスと比べて、貸与奨学金の使用における利害をどう取舍するのかについて、学生自身が判断しなければならない。

以上の視点で本研究は、まず学生の進路選択を明確にし（4節）、続いて経済支援のニードと認知を調べた上で（5節）、経済支援が果たす進路選択における役割を検討する（6節）。

## (2) 用いるデータ

本研究で用いるデータは、2009年11月に中国河北省A市に立地する5つの高校で行ったアンケート調査（日本語名称「経済支援状況に関する高校生調査」；中国語名称「高中生经济资助状况调查」）のデータである。河北省は、地形や気候の影響で農業が中心的な産業であり、経済的には特に発展した地域ではない。河北省の都市部1人当たり平均可処分所得は全国平均より下回り、農村部1人当たり平均純収入は全国平均とほぼ同じである。また、調査地域のA市は、全国における中レベルの河北省のうち、中心都市からさらに離れる地方都市である。調査対象が地方地域であるため、研究関心の対象と一致し、調査データの結果が最も研究関心の課題を解明できると考えられる。調査校5校の内、進学校が4校（都市立地2校、農村立地2校）で、職業高校が1校である。調査対象となる高校生は高校3年の学生である。質問紙の回収状況については、2000部を配布し、1857部を回収した。回収率が92.9%である。有効回答数が1785部である。本研究では主に進学校を対象に分析していく。

調査票の質問項目には、本人と家族の属性、進路選択の見込み、経済支援制度への認知とニード、将来への展望が含まれている。また、本研究における「貸与奨学金」は、国家助学ローンや生源地助学ローンを含めたすべての返済義務を有する奨学金を指している。

また、高校生の進路選択を考察する場合、高校生が卒業後の進路を追跡的に調査しなければならない。しかし、中国での追跡調査は極めて困難であるため、本研究が用いる進路選択に関するデータは学生の実際に行った進路選択ではなく、進路選択に対する見込みとした。

## 4 進路選択の見込み

### (1) 進路選択見込みの概要

調査票には詳細な進路先に関する項目が設けられ、「全国重点大学」、「省重点大学」、「一般本科大学」、「独立学院<sup>1)</sup>」、「私立大学」、「専科大学」、「就職」と「海外留学」が含まれている。「海外留学」は大学進学の一つではあるが、就学・生活費用への観点から、他の進路選択とかなり違う要因が含まれているため、進路見込みの分析から外した。その他の進路を大きく分けると、進学（「全国重点大学」、「省重点大学」、「一般本科大学」、「独立学院」、「私立大学」、「専科大学」）と就職（「就職」）の二種類に分けることができる。さらに、中国の高等教育機関の分類とランク分けによると、

進学を本科Ⅰ（「全国重点大学」と「省重点大学」）、本科Ⅱ（「一般本科大学」）、本科Ⅲ（「独立学院」と「私立大学」）、専科（「専科大学」）に分けることができる。本科Ⅰと本科Ⅱは国立四年制大学であり、本科Ⅲは私立四年制大学である。専科は本科Ⅰ、本科Ⅱと本科Ⅲと違い、三年制専科大学である。大学のランクで見ると、本科Ⅰはエリート大学で、ランクが高い。そのうち、全国重点大学のランクが最も高い。本科Ⅱは本科Ⅰよりランクが低い、本科Ⅲの私立大学よりはランクが高い。専科大学は本科大学のいずれよりもランクが低い。

表 4-1-1 進路選択の見込み（進学高校・％）

	就職	進 学						その他 留学	合計
		本科Ⅰ		本科Ⅱ	本科Ⅲ		専科		
		全国重点	省重点	一般本科	独立学院	民弁大学	専科		
可能性の高い進路	2.5	19.9	21.4	39.5	1.6	1.3	12.6	1.2	100.0
理想の進路	1.7	58.1	19.9	12.0	1.2	0.3	1.9	4.9	100.0

表 4-1-1 に進路選択の見込みをまとめている。進路選択には二つの項目があり、一つは「可能性の高い進路」、もう一つは「理想の進路」である。まず、可能性の高い進路については、就職を見込んでいる学生は2.5%しかおらず、進学を見込んでいる学生がほとんどである。さらに、本科Ⅰと本科Ⅱを見込んでいる学生が多いのに対して、本科Ⅲと専科を見込んでいる学生が少ない。次に、理想の進路については、就職を希望する学生がさらに少なくなり、進学を希望する学生が多くなる。また、進学先を見ると、本科Ⅰの中の全国重点大学を希望する学生が学生全体の半数以上を占めている。学生はよりレベルの高い進学先を希望することが分かる。

## (2) 進学先選択の規定要因

進路選択のうち、就職を希望する学生が極めて少ないため、これからの分析対象は進学を希望する学生のみ限定した。進学先を選択しようとする際に、どの要因が影響を与えるのか、統計的に分析した結果を表 4-2-1 と表 4-2-2 にまとめた。独立変数には学生の属性に関する変数（男子ダミー、農村出身ダミー、兄弟いるダミー、親低所得層ダミー、親高学歴ダミー、親職業専門管理職ダミー）、学業成績に関する変数（成績上位ダミー）と高校の特性に関する変数（高校農村立地ダミー）が含まれている。従属変数には「可能性の高い進路」の回答を用いた進学先別のダミー変数が含まれている。

まず、表 4-2-1 の分析結果を見ると、本科対専科の選択（モデル①）については、男子、成績のよい、高校都市立地の学生は本科を選ぶ傾向がある。本科ⅠⅡ対本科Ⅲ・専科の選択（モデル②）については、成績のよい、高校都市立地の学生は本科ⅠⅡを選ぶ傾向がある。また、本科Ⅰ対本科ⅡⅢ・専科の選択（モデル③）については、男子、親の学歴の高い、成績のよい、高校都市立地の学生は本科Ⅰを選ぶ傾向がある。すなわち、成績の良い、高校が都市立地の学生はより高い進学先を希望している。特に、本科Ⅰのような重点大学を希望する際、成績だけでなく、親の学歴が高ければ高いほど、進学希望が高くなる。

表4-2-1 進学選択見込みの規定要因分析（ロジスティック回帰分析・進学高校）

		モデル①	モデル②	モデル③
(従属変数)		本科 = 1、専科 = 0	本科ⅠⅡ = 1、 本科Ⅲ・専科 = 0	本科Ⅰ = 1、 本科ⅡⅢ・専科 = 0
(独立変数)		B	B	B
【学生の属性】	男子ダミー	0.471 *	0.307	0.311 *
	農村出身ダミー	-0.515	0.002	0.523 *
	兄弟いるダミー	0.290	0.196	0.031
	親低所得層ダミー	0.117	0.038	-0.280
	親高学歴ダミー	0.261	0.267	0.470 *
	親職業専門管理職ダミー	0.185	0.092	-0.278
【学業成績】	成績上位ダミー	1.473 ***	1.531 ***	1.004 ***
【高校の特性】	高校農村立地ダミー	-1.372 **	-1.786 ***	-1.714 ***
定数		1.889 ***	1.736 ***	-0.369
- 2 対数尤度		615.801 ***	686.142 ***	1144.722 ***
Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗		0.105	0.124	0.154
N		952	952	952

\*\*\*P&lt;.001 \*\*P&lt;.01 \*P&lt;.05 +P&lt;.1

【注】①親低所得層ダミーは親の月取合計が2000円、あるいは2000円以下 = 1、それ以外 = 0 とするダミー変数である。以下の分析も同様である。

②親高学歴ダミーは親の最終学歴が両親ともまた片方が大学 = 1、両親とも非大学 = 0 とするダミー変数である。以下の分析も同様である。

表4-2-2 進学選択見込みの規定要因分析（ロジスティック回帰分析・進学高校）

		モデル④
(従属変数)		本科Ⅲ = 1、専科 = 0
(独立変数)		B
【学生の属性】	男子ダミー	0.903 *
	農村出身ダミー	-1.405 *
	兄弟いるダミー	0.493
	親低所得層ダミー	-0.254
	親高学歴ダミー	-0.231
	親職業専門管理職ダミー	0.561
【学業成績】	成績上位ダミー	0.372
【高校の特性】	高校農村立地ダミー	0.676
定数		-2.233 **
- 2 対数尤度		187.641 +
Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗		0.054
N		222

\*\*\*P&lt;.001 \*\*P&lt;.01 \*P&lt;.05 +P&lt;.1

次に、学生は本科Ⅲと専科の間をどのように選択するのか。統計的に、本科Ⅲ対専科の進路選択（モデル④）規定要因の分析結果を見ると、表4-2-2のように、男子、都市出身の学生は本科Ⅲを選ぶ傾向が見られた。ただし、成績要因が統計的に有意ではなかった。学校のランク別から考えると、本科Ⅲが専科よりランクが高いため、本科Ⅲの入試成績合格ラインが専科の入試成績合格

ラインより高いことから推論すると、本科Ⅲと専科の進路選択では成績要因が効くはずである。しかし、統計的に成績要因が効かないことは、成績要因が本科Ⅲと専科の進学選択に影響する要因ではないことを意味している。言い換えると、(成績基準から専科の学生が本科Ⅲに進学することは不可能という場合を除き)、成績が本科Ⅲに進学可能な一部の学生は、本科Ⅲを選ばずに専科を選択しようとするため、成績による差がなくなっている。結局、本科Ⅲに進学しようとするのは男子、都市出身の学生である。

なぜ成績的には本科Ⅲを望むはずの学生がランクの低い専科を選ぼうとしているのか。本科Ⅲと専科の間で学校ランクと成績水準が違うほか、授業料の違いも無視できない。本科Ⅲの大学は基本的に独立学院や私立大学であるため、授業料の徴収水準が本科Ⅰと本科Ⅱの倍であり、専科の授業料よりもはるかに高い。金子(1987)は進学選択の構造について、進学の実効コスト(進学に要する経済的、非経済的な犠牲)の水準によってのみ決まるのではなく、両者の相対的な関係によって決定され、便益がコストを上回る時に進学を選択すると指摘している。このような考え方で本研究の調査結果を解釈すると、高額な授業料で受けた教育が将来それなりの見返りや便益を生むかどうかという選択が、進学選択の結果から読み取れる。つまり、女子や農村出身の学生にとって、本科Ⅲを選ぶコスト(授業料など的高額な費用を指す)が本科Ⅲの教育からもらえる便益(就職や給料などの見込みを指す)を上回った結果、成績が良くても、一部の学生が敢えて授業料の低い専科を選ぶようになった。従って、本科Ⅲと専科の進学選択の間に有意であるはずの成績要因が有意ではなかった。

以上の進路選択の分析結果をまとめてみると、本科対専科(モデル①)、本科Ⅰ・Ⅱ対本科Ⅲ・専科(モデル②)と本科Ⅰ対本科ⅡⅢ・専科(モデル③)の選択では成績要因が大きな影響を与えている。言い換えれば、成績の水準がモデル①、②、③のそれぞれの選択を決めている。一方、本科Ⅲの授業料水準が専科より高い現状の中、本科Ⅲ対専科(モデル④)の選択では成績要因が効かずに、男子、都市出身がランクのより高い進学先を選ぶことになっている。

## 5 貸与奨学金のニードと認知

大学に進学する前に貸与奨学金を利用しようとする学生はどのような学生なのか、またどのような学生に貸与奨学金がよく認知されているのか。これらの課題を考察することによって、貸与奨学金が必要となる学生層を解明し、貸与奨学金に関係する情報の普及状況を把握する。

### (1) 貸与奨学金のニード

統計的にどのような学生が貸与奨学金のニードを持っているのか、貸与奨学金ニードの規定要因についてロジスティック回帰分析を行った。モデルには「貸与奨学金を利用しないと進学できない」という貸与奨学金必要ダミー変数を従属変数として入れ、学生の属性、学業成績と高校の特性に関する変数を独立変数として入れ、結果を表5-1-1にまとめた。

表5-1-1 貸与奨学金ニードの規定要因分析（ロジスティック回帰分析・進学高校）

(独立変数)		B	
【学生の属性】	男性ダミー	0.095	
	農村出身ダミー	0.070	
	兄弟いるダミー	0.675	***
	親低所得層ダミー	0.608	***
	親高学歴ダミー	-0.480	+
	親職業専門管理職ダミー	-0.243	
【学業成績】	成績上位ダミー	-0.008	
【高校の特性】	学校農村立地ダミー	0.012	
	定数	-1.653	***
- 2 対数尤度		1077.813	***
Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗		0.075	
N		1005	

\*\*\*P&lt;.001 \*\*P&lt;.01 \*P&lt;.05 +P&lt;.1

【注】 従属変数=貸与が利用しないと進学できるかどうか…できない1、できる0。

統計的に貸与奨学金のニードに影響するのは兄弟変数と家庭所得変数のみである。兄弟数が多ければ多いほど、家庭所得が低ければ低いほど、学生が貸与奨学金を利用するニードが高まっていく。親の学歴変数は有意水準が10%の水準で有意な結果を見せた。家庭所得や兄弟数が家庭状況を反映し、家庭状況の良くない学生が貸与奨学金の利用を必要としている。

## (2) 貸与奨学金認知の規定要因

家計状況の良くない学生は経済的な支援が最も必要であると、以上の分析から分かった。しかし、貸与奨学金制度に関する情報が入手されないと、申請の行動が起こらない。高校生は経済支援制度を知っているかどうか、特に経済支援が必要と見られる学生にとって、貸与奨学金制度自体の認知度がどれぐらいなのか。以下の分析で貸与奨学金認知の規定要因に関する分析を通してこれらの課題を明らかにする。

表5-2-1に貸与奨学金認知の規定要因分析の結果をまとめている。都市出身、高所得層、成績の良い学生は、貸与奨学金を知っているという結果を得た。すなわち、家計状況のよい、成績の良い学生は、貸与奨学金を知っている。家計状況の良くない学生は最も経済支援を必要としていると見られるにも関わらず、貸与奨学金制度の認知度が決して高くないことが分かった。ちなみに、高校の特性は統計的に有意な結果が得られなかった。

表5-2-1 貸与奨学金認知の規定要因分析（ロジスティック回帰分析・進学高校）

(独立変数)		B
【学生の属性】	男子ダミー	0.162
	農村出身ダミー	-0.578 *
	兄弟いるダミー	0.094
	親低所得層ダミー	-0.389 *
	親高学歴ダミー	0.143
	親職業専門管理職ダミー	-0.249
【学業成績】	成績上位ダミー	0.336 +
【高校の特性】	学校農村立地ダミー	0.214
	定数	-1.183 ***
- 2 対数尤度		1104.295 *
Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗		0.019
N		1036

\*\*\*P&lt;.001 \*\*P&lt;.01 \*P&lt;.05 +P&lt;.1

【注】 従属変数=貸与奨学金…知っている1、知らない0。

### (3) 情報入手ルート

貸与奨学金のような支援の必要性はあるが、貸与奨学金制度への認知度は低く、ニードと認知のギャップがあることが今までの分析で分かった。学生はどのようなルートで情報を入手し、どのような要因で影響されるのか。調査票の中で、情報の収集には「高校の先生」「友達」「メディア」「ネット」「宣伝冊」というルートが含まれている。「高校の先生」と「友達」が比較的学生の勉学環境と生活環境に関係するのに対し、「メディア」と「ネット」が比較的最新の通信手段に依存している。「宣伝冊」は国の規定により大学の合格通知書に同封する資料であるため、最も一般的なルートである。ただし、宣伝冊の配布時期が大学合格後であるため、学生の進学選択への効果が限られている懸念がある。この点も踏まえて、学生の属性により情報入手ルートの違いがあるのかについて分析していく。

統計的に経済支援の情報入手ルートの規定要因を探るため、ロジスティック回帰分析を行った。情報入手ルートの規定要因分析では、表5-3-1のように、学生属性と高校特性に関する変数が有意な結果を得たが、学業成績で有意な結果が得られなかった。つまり、経済支援の情報収集に対して成績要因が影響を与えないことを意味している。

学生の属性と高校特性に関する変数が情報入手ルートに影響を与えるのを具体的に見ると、女子、親の学歴が低い学生は「高校の先生」から情報を入手し、女子、親の職業が低い学生は「友達」から情報を入手している。そして、女子、高所得層家庭出身の学生は「メディア」から情報を入手し、高所得層、高校都市立地の学生は「ネット」から情報を入手している。また、女子、低所得層家計出身、親の職業が非管理職の学生は「宣伝冊」から情報を入手している。

表5-3-1 貸与奨学金に関する情報入手ルートの規定要因分析  
(ロジスティック回帰分析・進学高校)

		高校の先生	友達	メディア	ネット	宣伝冊
(独立変数)		B	B	B	B	B
【学生の属性】	男子ダミー	-0.409 **	-0.361 *	-0.225 +	0.005	-0.401 *
	農村出身ダミー	-0.303	-0.009	0.138	-0.098	-0.080
	兄弟いるダミー	-0.006	0.198	-0.208	-0.161	0.222
	親低所得層ダミー	0.156	0.112	-0.300 +	-0.363 *	0.461 *
	親高学歴ダミー	-0.337 +	-0.149	0.073	0.012	-0.061
	親職業専門管理職ダミー	-0.229	-0.492 **	-0.071	0.194	-0.509 *
【学業成績】	成績上位ダミー	0.122	-0.168	0.105	0.085	-0.067
【高校の特性】	学校農村立地ダミー	0.138	0.102	-0.249	-0.433 *	0.203
	定数	0.042	-0.545 *	-0.093	-0.365	-1.411 ***
	- 2 対数尤度	1393.108 **	1233.928 ***	1381.765 +	1410.644 +	846.879 *
	Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗	0.024	0.035	0.014	0.014	0.016
	N	1036	1036	1036	1036	1036

\*\*\*P<.001 \*\*P<.01 \*P<.05 +P<.1

【注】 従属変数=高校先生…そう1, そうではない0; 友達…そう1, そうではない0; メディア…そう1, そうではない0; ネット…そう1, そうではない0; 宣伝冊…そう1, そうではない0。

ネットやメディアの通信手段を利用する学生は家計状況の良い学生であるのに対し、宣伝冊を利用する学生は家計所得の低い学生である。また、高校の先生と友達のルートについては、統計的に家計所得の変数が有意ではなかったが、高校の先生ルートが親の学歴の低い学生、友達ルートが親が非管理職の学生によく使われることが分かった。親の学歴が低いことと、親が非管理職に就くことは、家庭の社会的地位が決して高くないことを表している。従って、社会的地位の低い家庭出身の学生は、高校の先生や友達のような人的な情報ルートに依存している。人的な情報ルートによる情報伝達のスピードは遅いだけでなく、情報の行き届かないことが極めて多い。特に情報の閉塞は、家計困難な学生にとって進学の実機を狭める可能性が高い。一方、家計状況の良い学生はテレビやパソコンなど情報を瞬時に収集できる電子機器を有するため、人的な情報ルートに依存しなくてよい。その結果、情報入手ルートの違いが、家計状況の異なる学生の間に情報ギャップをもたらしている。

## 6 貸与奨学金の進学選択見込みに対する効果

貸与奨学金は家計困難な学生の進学を促進する効果が期待される。ここでは学生が進学先を思案する際に貸与奨学金の有無がどのような役割を果たしているのかを、学生の見込んである進路先別に見ていく。独立変数には、学生の属性、学業成績と高校の特性に関する変数以外に、奨学金に関する変数（貸与申請ダミー）も入れて考察する。

表6-1に進学先別に進学選択見込みの規定要因に関する分析結果をまとめている。本科対専科（モデル①）と本科ⅠⅡ対本科Ⅲ・専科（モデル②）の選択については、成績、性別と高校立地変数が有意な結果を得たが、奨学金の変数は有意な結果が得られなかった。しかし、本科Ⅰ対本科ⅡⅢ・専科（モデル③）の選択については、男子、農村出身、親の学歴の高い、成績のよい、高校都

表 6-1 進学選択見込みの規定要因分析（ロジスティック回帰分析・進学高校）

		モデル①	モデル②	モデル③
(従属変数)		本科 = 1、 専科 = 0	本科 I II = 1、 本科 III・専科 = 0	本科 I = 1、 本科 II III・専科 = 0
(独立変数)		B	B	B
【学生の属性】	男子ダミー	0.568 *	0.392 +	0.261 +
	農村出身ダミー	-0.595	-0.054	0.444 +
	兄弟いるダミー	0.368	0.270	0.006
	親低所得層ダミー	0.186	0.102	-0.296
	親高学歴ダミー	0.302	0.302	0.487 *
	親職業専門管理職ダミー	0.204	0.103	-0.226
【学業成績】	成績上位ダミー	1.504 ***	1.565 ***	0.967 ***
【高校の特性】	高校農村立地ダミー	-1.354 **	-1.784 ***	-1.662 ***
【奨学金】	貸与申請ダミー	0.084	0.027	0.332 *
	定数	1.738 ***	1.608 ***	-0.477 +
- 2 対数尤度		599.323 ***	669.596 ***	1113.239 ***
Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗		0.109	0.128	0.150
N		924	924	924

\*\*\*P<.001 \*\*P<.01 \*P<.05 +P<.1

市立地、貸与奨学金を申請する学生は、本科 I を選ぶ傾向があると見て取れる。つまり、どのモデルにおいても、本科への進学は成績要因がとて重要であることが分かる。(モデル③の分析によると)成績が良くても最も高いランクの本科 I に進学できる学生は、貸与奨学金を申請して本科 I に進学する。一方、(モデル①とモデル②の分析によると)ランクの低い進学先を含めて選択する場合、成績が最も重要な要因で、奨学金の効果が確認出来なかった。

本科 III 対専科の選択 (モデル④) については、前の分析で表 4-2-2 に奨学金に関する変数を加えない場合、男子、都市出身の学生が本科 III を選択する。成績要因が統計的に有意ではない結果が見られた。表 6-2 には奨学金に関する変数を加えて分析した結果、学業成績要因に依然として統計的に有意な結果が見られなかった。これは本科 III と専科の間に成績の差がなくなったことを意味する。統計的に有意な結果が現れたのは、性別ダミー、出身ダミーと貸与申請ダミーである。男子で、都市出身の学生が貸与奨学金を利用して本科 III を見込んでいる。つまり、本科 III と専科の進路選択においては、本科 III の授業料が高いものの、都市出身の男子が、貸与奨学金を利用して進学しようとしている。一方、成績が良いにもかかわらず本科 III を選ばない一部の学生は、貸与奨学金を申請せずに専科を選ぶ傾向が見られた。

以上の進学選択で貸与奨学金を申請するかどうかについて考察した結果、最もランクの高い進学先を選ぶ際に貸与奨学金を利用しようとしている。また、授業料の高い本科 III を選ぶ際に貸与奨学金を利用しようとしている。それぞれの貸与奨学金利用の理由を解釈すると、まず本科 I を選ぶ学生は、大学教育からもらえる便益が貸与奨学金のコストよりはるかに高いと見込んでいる。従って、貸与奨学金の利用が彼らにとっては教育機会が保障されただけでなく、教育を通じて将来性を高めることも意味している。次に、本科 III を選ぶ学生は、男子、都市出身で、進学見込みが比較的高い

表6-2 進学選択見込みの規定要因分析（ロジスティック回帰分析・進学高校）

		モデル④	
(従属変数)		本科Ⅲ=1、専科=0	
(独立変数)		B	
【学生の属性】	男子ダミー	0.894	*
	農村出身ダミー	-1.461	*
	兄弟いるダミー	0.487	
	親低所得層ダミー	-0.128	
	親高学歴ダミー	-0.159	
	親職業専門管理職ダミー	0.691	
【学業成績】	成績上位ダミー	0.312	
【高校の特性】	高校農村立地ダミー	0.644	
【奨学金】	貸与申請ダミー	0.753	+
	定数	-2.521	**
- 2対数尤度		183.148	*
Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗		0.071	
N		220	

\*\*\*P<.001 \*\*P<.01 \*P<.05 +P<.1

と考えられる。従って、授業料が高くても貸与奨学金を利用しようとしている。これに対して成績が良いものの、敢えて専科を選ぶ学生にとっては、本科Ⅲに進学する際の高額な授業料に、仮に貸与奨学金を利用する際の返済を加えると、コストがあまりにも大きい。そうすると、コストの高い本科Ⅲに進学するより、むしろランクの低い専科に進学したほうが、コストが低く抑えられるだけでなく、貸与奨学金の返済義務を背負わなくて済む。

## 7 まとめ

以上の分析から、高校生の進路選択、貸与奨学金の認知とニード、及び貸与奨学金の進学選択への役割について考察した。得られた知見は以下の通りである。

学生の進路選択（4節）については、進学を希望する学生の割合が非常に高い。成績優秀な都市出身、しかも都市の高校で勉強する学生が、より高い進学先を選ぶ傾向がある。一方、本科Ⅲ対専科の選択においては、成績要因に有意な結果が見られなかった。

貸与奨学金のニードと認知（5節）については、家計状況の良くない学生は最も経済支援を必要とすると見られるものの、奨学金の認知度が決して高くない。なぜなら、家計状況の異なる学生の間に情報入手のルートの格差があり、情報ギャップが生じている。

貸与奨学金の進学選択への役割（6節）の分析では、本科Ⅰのような成績を重視する大学に進学しようとする学生は、貸与奨学金を利用して進学しようとするという結果が出た。また、本科Ⅲ対専科の選択に関する分析では、成績要因に統計的に有意な結果が見られず、都市部出身の男子は貸与奨学金を利用して本科Ⅲへの進学を見込んでいるのに対し、農村出身の学生は貸与奨学金を利用せずに専科への進学を見込んでいるという結果になった。貸与奨学金は優秀な学生の進学促進効果

を果たしていることを評価できる一方、本科Ⅲを選ばずに敢えて専科を選ぶ学生が貸与奨学金の利用を回避する傾向を確認した。

貸与奨学金には返済義務があるため、学生自身で利害を衡量した上で利用するかどうかの判断をしなければならない。成績や将来性に関して見込みを持たない学生は、貸与奨学金が必要でも、敢えて貸与奨学金に手を出さずにランクの低い進学先を選ぶ可能性が高い。将来への見込みが進学前に貸与奨学金を利用するかどうかの決め手となっている。もちろん、高校生の将来への見込みがどれぐらいの正確性を持っているのかという点に留意して、貸与奨学金を利用しない理由をさらに考察する余地がある。しかし、貸与奨学金が成績優秀な学生の進学選択や、本科Ⅲのような授業料の高い進学先への選択行動に影響を与えたことから、貸与奨学金の教育機会保障の役割を評価すべきである。

## 注

- 1) 独立学院は中国高等教育の私立セクターであり、国公立大学が教員などの学内資源を使って設置した教育機関である。

## 参考文献

- Horn, L.J., Chen, X.L., Chapma, C., (2003), *Getting ready to pay for college: What student and their parents know about the cost of college tuition and what they are doing to find out.*, National Center for Education Statistics, Washington, DC.
- Johnstone, D.B., & Arora, A. & Experton, W., (1998), *The Financing and Management of Higher Education: A Status Report on Worldwide Reforms*, Washington, DC: The World Bank.
- Johnsonte, D.B., & Mehta, P.S, (1999), “*Higher Education Finance and Accessibility: An International Comparative Examination of Tuition and Financial Assistance Policies.*”, The International Comparative Higher Education and Finance Project HP.
- Johnstone, D.B., (2002), “Chinese Higher Education in the Context of the Worldwide University Change Agenda.” The International Comparative Higher Education and Finance Project HP.
- Johnstone, D.B, (2005), “Higher Education Accessibility and Financial Viability: The Role of Student Loans.” *The World Report on Higher Education: The Financing of Universities II* International Barcelona Conference on Higher Education.
- Johnstone, D.B., & Marcucci, P.N., (2010), *Financing Higher Education Worldwide: who pays? Who should pay?*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Long, B.T., (2003), “*Does the format of a financial aid program matter? The effect of state in-kind tuition subsidies.*”, NBER working paper, No.9720.

- Long, B.T., (2008), *The effectiveness of financial aid in improving college enrollment: lessons for policy.*, Havard graduate school of education NBER and NCPR.
- Loyalka, P., & Song, Y.Q., & Wei, J.G., & Rozelle, S., (2011), “*Information College Decisions and Financial Aid: Evidence from a cluster-randomized control trial in China.*”, American Economic Association.
- Olson L., & Rosenfeld, R.A. (1984), “Parents and the Process of Gaining Access to Student Financial Aid.”, *Journal of Higher Education.*, 55(4), pp.455-480.
- Shi, Y.J., Zhang, L.X., Bai, Y.Y., Luo, R.F., Sylvia, S., Sharbono., B., & Rozelle, S., (2007), “*Taking the next step: are information and finance holding poor rural students back?*” Northwest Socioeconomic Development Research Center working paper, E4.
- Woodhall, M., (1983), “*Student Loans as a Means of Financing Higher Education:Lessons from International Expericence.*”, World Bank Staff Working Papers Number 599.
- Ziderman, A., & Douglas, A., (1995), *Financing University in Developing Countries*, Washington,DC: The Falmer Press.
- 金子元久 (1987) 「教育機会均等の理念と現実」『教育社会学研究』第42集, pp.38-50。
- 小林雅之 (2007) 「高等教育機会の格差と是正政策」『教育社会学研究』第80集, pp.101-125。
- 濱中義隆 (2009) 「情報ギャップと高校・大学における金融教育」『高等教育段階における学生への経済的支援の在り方に関する調査研究』, pp.127-140。
- 藤村正司 (2009) 「大学進学における所得格差と高等教育政策の可能性」『教育社会学研究』第85集, pp.27-48。
- 丁小浩 (2000) 「对中国高等院校不同家庭收入学生群体的调查报告」『清华大学教育研究』No.2, pp.102-108。
- 罗朴尚・宋映泉・魏建国 (2011) 「高中学生对大学成本和学生资助信息的知晓状况分析—基于对我国西部41个贫困县的调研」『教育发展研究』No.21, pp.7-13。
- 钟宇平・陆根书 (1999) 「收费条件下学生选择高校影响因素分析」『高等教育研究』Vol.2, pp.31-42。